巻/頭/言

インターネット時代の社会インフラシステム特集に寄せて

大阪府立大学大学院工学研究科
電気・情報系専攻情報工学分野

教授　大松　繁

1980年３月に１か月間インド北東部ラクノウ市のインド鉄道研究所へ振動解析の研究で招聘(しょうへい)され，そのときの印象が今も鮮明に脳裏に焼き付いている。ヒンズー教の祈りの声で目を覚まし，窓を開くと真っ赤なバラと原色に近い様々な花で彩られた庭園が広がり，実に大きい太陽が昇り始めていた。研究討論を終えると，夕方から研究所の方々と一緒に１時間程度の散歩に出掛けた。この散歩は，牛車，人力車，廃車に近い乗用車，窓の壊れた乗合バス，高級外車，やせ細った牛，物乞い(ものごい)，美しいサリーをまとった女性等々が渾然(こんぜん)となって動いている一般道を少し歩き，その後は田舎道を歩くコースだった。椰子(やし)の木が疎(まば)らに生えた田んぼに赤い太陽が悠々と沈んでゆき，目の前を蒸気機関車が溢(あふ)れんばかりに乗客を乗せて苦しそうに走っていた光景は印象的であった。このように多様性が大きくしかも混沌(こんとん)とした社会に住み，毎日歩きながら一日を振り返り明日を考える生活を繰り返す間に，近隣のブッダガヤで悟りを開いたお釈迦様のような聖人が再び現れるのではないかと想像を大きくしたこともあった。

さて，前置きが長くなったが，インドは文明の発祥の地であるにもかかわらず，現在では発展途上国の烙印(らくいん)を押されている政情の不安定な国家である。しかし，最近ではインド南部のバンガロールを中心にソフトウェア産業やIT技術が目覚ましい発展を遂げていると聞いている。インドで発生した文明はヨーロッパに伝わって科学を生み，それが米国や日本で工学的技術を開花させ，再びインドに戻ってソフトウェアを開化させるという回帰説もささやかれている。

他方，日本では情報工学の重要性が早くから認識され，1970年に東京工業大学や大阪大学などに情報工学科が設立され，その後，多くの大学に同様な学科が新設されていった。しかし，日本発のソフトウェア体系が何故出てこなかったのだろうか(自戒も込めて)と思う。これは，情報の後追いに終始し，日本独自の情報システムを構築しようとする意気込みが欠如していたことと，ITの独創性を涵養(かんよう)する環境が整備されていなかったためであろう。最近，IT＝輸入住宅，すなわち，ITに関しては欧米の真似(まね)ばかりであり，日本が行っていることは輸入住宅に和室を作るぐらいの技術しかないという手厳しい批判がある。ITの世界では all or nothing の技術がほとんどであり，それが de facto standard を勝ち取るかさもなくば退散しなければならない厳しい世界である。創造性豊かな一流のリーダと優秀なサポータが居れば，人数はあまり重要ではない。これは差別化につながる危険性があり，多様性を好まず協調性・画一性を尊重する日本の風土にはあまり馴染まないシステムである。しかし，インターネットの普及につれて，距離・時間・国家の枠を超えて情報が自由に往来できる社会が形成されつつあり，世界の動きを無視した鎖国社会は不可能になっている。

冒頭に述べたインドで何故IT化が急速に進歩しているかについて考えると，インドには多様性，独自性，哲学的思考法など幾つかの優れた素地があるように思われる。したがって，インターネット社会で成功を収めるには，人的のみらず制度的にも多様性のある社会形成が必要で，地球規模で物事を考えることができ，独創性が高くて倫理観の強い人々を輩出する教育が求められている。また，インターネット社会では地球規模で見知らぬ人々と付き合うことになり，自己防衛用のセキュリティ教育も必要である。

この特集で企画されたインターネット時代の社会インフラは，安全性・利便性・経済性の観点からITの全容をまとめ将来展望を述べたものであり，時機を得た特集であると思われる。